

勤儉尚武 勤儉尚武

vol. 19

Australia Report

去る7月17日から29日まで、オーストラリアにある Victoria 州 Melbourne と Queensland 州 Brisbane に合気道の指導に行き参りました。

今年3月に仕事でメルボルンを訪れた際、現地の道場を予め website で調べ、指導者に自己紹介と稽古に参加したい旨を伝え、稽古着を持参し、数箇所の道場を訪れました。行ってみると、その日の稽古で教えて欲しいと頼まれ、指導した所、大変気に入ってもらい、その週末に指導者たちを集め、2日間のミニセミナーを行いました。

それがご縁で、今回の訪問が実現したのですが、現地のネットワークは素晴らしく、ブリスベンでもセミナーを開催する手配をしてくれました。その模様を報告させていただきます。

【メルボルン】

出発当日、日本は真夏でしたが、現地は真冬、ダウンジャケットとセーターを機内持ち込みのカバンに詰め込みました。成田経由でしたので、成田で乗り継ぎ便を待つ事5時間20分、更に乗り継ぎ便の出発が1時間半遅れると言う事で、結局7時間ほど成田空港で過ごしました。搭乗するや否や爆睡！翌日2時間遅れでシドニーに到着しましたが、更に運が悪い事にローマ法王がシドニーを訪れているので、50万人の巡礼者がシドニーを目指してやって来る為、入国管理事務所に長蛇の列。入国審査に2時

間ほどかかり、次の乗り継ぎ便に間に合わず、更に待つ事4時間、結局メルボルンに着いたのが翌日の午後4時半、実に家を出てから31時間が経過していましたが、道中ほとんど眠っていたので、全く疲れは感じませんでした。

19日(土)

セミナー第1日目。4道場から25名が参加。受身の基本、基本技、連続技など、合気道の基本的な考え方を伝えてきました。やはり、言葉の壁が厚いらしく、見よう見まねで技の習得を試みるしか手立てがないのが実情です。しかし、これまであまり理解できていなかった事も私の拙い英語による説明で良く理解できたと、大変喜んでいただきました。稽古終了後、セミナーディナーと称して、ご馳走になりました。



20日(日)

セミナー2日目。ほぼ同じメンバーが参加。1日目に稽古した基本を活かしつつ、一杯受身をしながら応用技を練習しました。セミナーは午前中で終了しましたが、午後は指導者だけを集めて、杖型1、杖投げ、杖取りの練習をしました。参加者は、あいまいな理解で行っていた様々な動きも、きちんとした意味を理解して稽古が出来たことに、心地良い筋肉痛を感じながらも、大変満足気でした。



メルボルンでのセミナーを通して感じたことは、彼らは日本の先生から正しい技を学びたがっていると言う事です。

更に、翌日 21 日（月）には、今回のセミナーを企画してくれた Colin 氏の道場に行って、指導してきました。今回セミナーに参加しなかった人たちからも、来年もう一度来て欲しいと頼まれ、来年のセミナーの良い宣伝にもなりました。稽古後、タイ料理の店でご馳走になり、オーストラリアのビールやワインなどでもてなしていただきました。



翌 22 日（火）には、Gess(ジェス)氏の道場に招かれ、ここでは子供クラスと一般クラスの両方で教えました。ここでも多くの人に感動を与えたようです。稽古前、時間がたっぷりあったので、道場がある New Port という町を案内してもらいました。名前の通り、歴史ある美しい港町で、遠くにメルボルンの街が見える大変情緒のある町でした。



【New Port】

ジェス夫妻はイタリア系移民 1 世と 2 世なので、有名なイタリア料理の店で昼食をご馳走になりました。このレストランはジェス氏の友人の店で、築 200 年ほどの由緒ある建物で、料理も魚介類をふんだんに使ったとても美味しいものでした。デザートは信じられないくらい大きく、食べ切れませんでした。とてもおいしかったので、夕食はタイ料理の予定だったのに、夕食も同じ店でご馳走になり、おいしいワインもたくさん頂きました。



23日、24日の2日間は、3月に訪れたときのホストファミリーPeter氏のところでお世話になりました。ピーターもイタリア系移民1世で、大変苦労された結果、現在では40,000平方メートルの広大な敷地一面に栗林を所有し、教師の傍ら農家として暮らしています。敷地内の家は、友達に手伝ってもらいながら、自分で建てたものです。更に、自分で年間1,500本ほどのワインを生産し、ミニワイナリーも自作で、その2階には現在新たに住居を増築中です。友人からは「タージマハール」と呼ばれています。何でも自分で作ってしまう彼は、「戦前のイタリアは大変貧しく、おじいさんもお父さんも学校には行っていないけど、色々な技術を身に付けていて、それを受け継いでいる」と言います。思わず頭が下がる思いでした。

※タージマハール

ムガル帝国（現インド）5代皇帝シャー・ジャハーンが、亡くなった王妃のために1632年から22年の歳月をかけて造営したもの。Peterの奥さんは健在ですが、彼が奥さんのために建設中ということで、このように呼ばれています。



(左から2番目がPeter氏)

【ブリスベン】

25日午前6時30分、外気温摂氏3度、真っ暗闇の中、ColinとJackieに空港へ送ってもらい、ブリスベンに向かいました。

「Brisbaneは暖かいよ」と皆が口をそろ

えていうので、冬装束はすべてスーツケースにしまい込んでしまったのですが、異常気象のためMelbourneとあまり変わらない位寒く、風をひきそうでしたが、あと数日で猛暑の日本に帰ると思うと、ものは考えよう、「この涼しい気候を楽しもう！」と決めました。すると、不思議と寒さも気にならなくなりました。暖かいと期待していたBrisbaneが寒かったので、期待はずれで、いっそう寒く感じていたのだと思います。やはり心のもちようですね、何事も！

26日(土)

セミナー第1日目。お世話になったDaniel James氏はGriffith大学で教鞭をとる教授で、大学内にあるスポーツセンターを借りて行われました。このセミナーには、数百kmも離れたシドニーやその他いくつかの道場からの参加もあり、40名を超えていました。



Melbourneで、皆あまり投げてもらってないと感じたので、若手を中心に一杯受身を取らせました。「次は誰が見本の受けをしてくれる？」と聞くと、いつも数名が競い合って申し出ました。ここでも、英語による簡潔な説明は大変喜ばれました。

27日(日)

セミナー2日目。大学内のメンテナンスのため停電。朝からDanielが発電機とライトを買うために奔走し、無事セミナーを開始する事ができました。幸い、11時頃に電気が復旧したので、通常通りの稽古が出来

ました。彼の友人は、朝 7 時に大学のセミナー会場に明るさを見に来て、照明が必要と判断し、Daniel に連絡したそうです。やはり主催者は大変！

午前中は、色々な連続技を 2 時間休み無く稽古し、若くない人たちも息を切らせながらも、大変楽しんでいる様子でした。午後は、杖技 1 についてそれぞれの動きの意味を説明した後、「組太刀」をし、その後型を、2 時間延々と練習しました。

参加者の最年長は 73 歳のおばあさんで、若者と同じように受身を取り、杖型も 2 時間脱落することなく、最後まで参加されたのには、感動しました。歳を重ねても楽しみながら続ける事が大切だと、改めて教えられた気がしました。

【セミナーを通して思う事】

彼らは、年に 1 回自分たちの会のトップの先生の技を見たり、書籍や DVD などを見て真似るしか手段がないのです。彼らの教本を見ると、事細かく説明が書いてあり、日本の文化や歴史についても触れられた非常に丁寧な教本なのですが、やはり直接英語で説明を聞いて稽古することができるというのが一番だと思います。当会では、昇段審査の審査項目は、非公開ですが、オーストラリアでは、その教本にすべて書いてあります。これは、日本文化を全く知らないところからはじめる外国の人にとってはやむを得ないと思います。日本で稽古していれば、日本語で説明を受けられるし、解らなければ日本語で聞けばすぐに答えてもらえます。そういう意味では、当会の会員である皆さんは恵まれた環境にいることを知っていただきたいと思います。彼らは本家本元の合氣道を強く求めています。それに答えられるよう稽古に励んでください。

今回のオーストラリアでのセミナーは、手前味噌かもしれませんが、大成功だった

と思います。30 年ほど前に合氣道を初めて以来修行を続けてきて本当によかったと思います。学生時代に基礎から教えて頂いた先生方にまず感謝したいと思います。そして、我師である藤平光一先生、現在の師である大島先生、そして唯心会合氣道会長の丸山先生に感謝しております。

これまで、師に対しては最大限礼を尽くし、また松阪にお招きするときは惜しみなく最大限のおもてなしをしてきたからこそ、「教え」を頂けたものと確信しております。昨今の教育現場を見ておりますと、耳を疑うような「モンスター・ペアレント」の存在が取りざたされております。誠に由々しき事態です。



モンスターペアレントイメージ図

私が若いころは、生徒は先生に対しては礼を尽くすことは当たり前でしたが、今は友達かそれ以下の扱いです。まして、親は子供のことがかわいいから、先生に対しては絶対に文句など言えなかったし、子供の前で先生の批判をすることなどできなかったのですが、今では平気で「理不尽な要求」をする親もいると聞いております。「武道は礼に始まり、礼に終わる」、これは行動だけではなく、心の問題なのです。師を敬う心

があるかどうかでその態度が決まるのです。何でも主張すれば良いというものではありません。そのことを若い世代に伝えることも大切だと思います。

順心会合氣道系図

合氣道開祖（植芝盛平）
|
藤平光一先生（氣の研究会）
|
丸山先生・大島先生・その他数人（内弟子）
(唯心会) (弘道会)
|
橋本順武
(順心会合氣道)

藤平光一先生の教えを受けた者としてこの素晴らしい合氣道を後世に伝えなければなりません。人は歳をとるものです。これは事実です。そして誰もが平等に、一歩ずつ、確実に「死」に近づいているのです。藤平光一先生は 87 歳、丸山先生は 72 歳、大島先生は今年 60 歳、そして私は・・・10 年後はみな何歳になるのでしょうか？

そこで、現在それぞれの組織で、ばらばらに活動している元内弟子たちが力を合わせて、優れた指導者を養成する時期ではないかと思います。今回オーストラリアを訪れたのは、その第一歩です。そして、2010 年のゴールデンウィークに 3 日間の日米豪 3 カ国合同合宿を松阪市武道館で開催する計画が進行中です。各国で活躍する指導者をお招きし、各国から参加者を募集します。順心会がホストですので、「さすがご本家！」と外国の人々に思われたいと思います。そして、後世に伝えていくために、優れた指導者を育てる決意です。どうか皆さん、力を貸してください。

【オーストラリアからの手紙】
先日から、何通かのメールが届きましたので、ご紹介します。

Dear Sensei

Thank you so much for the Aikido seminar, we all enjoyed it. I like your style of teaching, breaking a technique down into its basic form then going deeper and increasing the levels, so beginners through to advanced & experienced beginners can learn and have fun along the way.

I certainly felt inspired after the seminar, when you said young people should train as much as possible and older people should enjoy and teach aikido to others.

I want to come to Japan to train train and train, it may take a year, but its my plan.

Thank you again Sensei 😊

YOURS

SINCERELY PAUL SMITH

(要約)

「親愛なる先生；

セミナーはとても楽しかったです。楷書→行書→草書と段階的に練習するスタイルが好きです。先生は、「若者は出来るだけ一生懸命稽古し、若くない人は稽古を楽しみつつ、若い世代に合氣道を伝えて欲しい」とおっしゃいましたが、その言葉にとっても感銘を受け、1 年後日本に行って、稽古・稽古・稽古の日々を送りたいです」

ポール・スミス

Griffith Shukan News

Thursday, 7th August 2008

2. Review Of Hashimoto Sensei Seminar

Two weekends ago Griffith Aikido hosted a seminar by a visiting Japanese instructor - Yoshitake Hashimoto Sensei. Although Hashimoto Sensei maintains his independence from any other style or school, he comes from long history training in the Ki Society and his aikido strongly reflects this style.

As someone who trained in old days, before we became Aikido Yuishinkai, this seminar was reminiscent of old times, a revisiting of some of the roots of our style, but came with a fresh perspective. I came away with a new appreciation of Ki Aikido, and, as with all good seminars, a revitalisation for training.

As an English teacher, Hashimoto is in an excellent position to offer clear, direct instruction without the usual limitations of the Japanese/English language barrier. The generational barrier was no obstacle either like when he pointed out the incorrect way to do something and told us "This is not cool." His unpretentious, friendly and approachable personality combined with good humour helped us to practise in a relaxed manner, which was fortunate for us as it was a major focus during the seminar.

Another major focus of the seminar was Sensei's thoughts on ukemi. The emphasis was on following fully and remaining light, not leaning on nage, not burdening nage with our full weight. The techniques that followed

encouraged uke to maintain this form and thus highlight the relationship between giving ukemi and performing technique. Uke was encouraged to continue giving energy and to keep moving (until they literally have no option but to fall), but at a safe speed for all to practise. I thought this was an excellent training tool, particularly for the development of junior students - leading to higher-level ukemi (as uke) and for dealing with higher energy attacks (as nage).

One of the most impressive things about the seminar for me was that nearly all of the techniques taught were relatively uncomplicated and many of which we had all done before. His emphasis seemed to be on training, for the long term, rather than "let's learn this new flashy move". Young students were encouraged to train hard and with vigour their "gas mileage" was tested as Sensei threw them again and again until they could take no more. Older students were reminded of their responsibility to pass on the art to the younger ones sharing the benefits of aikido for the body and the mind and for the pure joy of training itself.

With his emphasis on relaxation and Ki extension, Hashimoto Sensei provided an important opportunity to re-visit a way of training different from our usual practice. Part of the reason for his visit to Australia was to build a relationship between himself and Australia. In doing so he opens a door to some of the roots of our style where other doors, for political reasons, remain closed. I think we are very fortunate to have the capability and the will to help create this type of opportunity and look forward to the next instalment.

Written tag team by Gabby and Paul

Griffith Aikido Newsletter Editor

Shirin Mohebbi

Email: [shirin\(AT\)internode.on.net](mailto:shirin(AT)internode.on.net)

グリフィス週刊ニュース

2008年8月7日(木)

(要約)

「2週間前、グリフィス合気道は橋本順武先生をお招きしました。先生はどの組織にも所属しておられませんが、長年氣の研究會に所属され、先生の技にそれが見られました。

古い会員が、『我々が、唯心会になる前に稽古していた古き時代を彷彿させるものだが、新鮮な面も感じられた』と言っておりました。そして、再び稽古に対する活力をもらいました。

英語の教師としての先生は、言葉の壁を常々感じている我々には、明確な直接の指導を受ける、素晴らしい存在です。世代間の壁も感じられず、先生の控えめで、親しみやすくユーモアのある性格がリラックスした雰囲気稽古を作り出しています。

もう一つの焦点は、受身です。「受け」が「投げ」に重みをかけず、「投げ」の動きについて行くことにより、「投げ」・「受け」両者の動きがスムーズに行われ、エネルギーを出し続け、動き続けることができる。これは大変良い稽古法です。

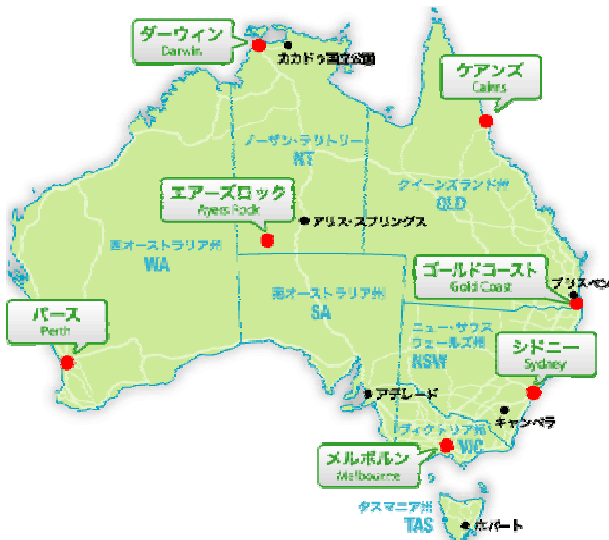
セミナーで私が最も印象に残ったのは、「この新しい、派手な技を練習しよう」ではなく、既習の技ばかりだが、稽古その物の重要性を先生が強調されていた事です。若い生徒達を先生は何度も何度もへたばるまで投げ、※「燃費」を試されていました。そして、年上の生徒はこの武道を若い世代に伝える責任感を呼び覚まされ、心身の鍛

錬と稽古そのものの楽しさを共有しました。橋本先生は、リラックスと氣を出す事を強調され、我々の普段の稽古とは違った稽古法を再認識する重要な機会を与えてくれました。先生のオーストラリア訪問の目的は、オーストラリアとの良好な関係を築くことで、我々の流派のルーツは政策的な理由で閉ざされている中、先生がいくつかのドアを開けてくれました。このような機会を得た事を幸運に思い、次の機会を楽しみにしています。」

※オーストラリアの車は、V8-6リッターの大きいエンジンを搭載しているので、燃費が悪いという話をセミナー前に話していたので、体の大きいオーストラリア人に例えた話です。

「オーストラリア・レポート」は如何でしたか？手前味噌ですが、海外で高い評価を受けました。皆さんも、日本の伝統文化を後世に伝え、海外に普及する一翼を担っていただけませんか？

「一日学べば、既に一日の師である」と言われるように、誰でもその氣になれば出来ます。年齢に関係なく、技の上手・下手は関係なく、やる「氣」次第です。是非、私に力を貸してください。



Aiki Kids

子供合宿

去る、7月12日(土)13日(日)の両日、度会郡大紀町大内山にある『グリーンパーク大内山森の家』に宿泊し、『B&G 体育館』で1泊2日の子供合宿を実施しました。最年少は小学1年生で計22名の子供と補助の大人を合わせて31名が参加しました。

兄弟姉妹が少ない今日、同世代の子供たちと寝食を共にする事は大変貴重な体験になります。個性がぶつかり合いながら、人とうまく付き合っていく術を自然と身に付けていきます。不登校や引きこもりなどは、そのような体験が不足している事が大きな原因の一つだと言われています。

1日目、バスの中は戦争状態、まず、それぞれの個性がはじけだしました。到着後、体育館で畳敷き。重い柔道畳は一人では持てず、協調性を感じました。1時間稽古してから昼食。愛情たっぷりの手作り弁当に、子供たちは親に感謝の気持ちを抱きます。それが、コンビニの弁当であってもおながすいた時に食べ物の有難さに感謝するよう、周りの大人たちも諭していました。その後、5時まで稽古。さすがに疲れた様子。

コテージに戻り入浴。お風呂は貸しきり状態だったので再び戦争状態。正に、裸の付き合い。私が子供の頃は、多くの家庭でまだ風呂がなく、銭湯に行っていました。このような体験の不足が人との交わり方が苦手な子供を生んでいるのでしょう。



夕食は、ご馳走が食べきれないほどたくさん出され、皆大満足。夕食後、花火をしましたが、補助に来てくれたお兄さんやお姉さんがリードして、とても楽しいものに

なりました。中にはルールを破って、叱られる子供たちもいましたが、それも大切な経験でした。



2日目は、朝から自由に川遊び。危険を避けるため、一定のルールは設けましたが、皆、自然の一部になりきり、夢中で遊んでいました。保護者の方から差し入れをして頂いたスイカで「スイカ割り」をし、割れたスイカを皆でハイエナのように手づかみで食べました。一人の子が「手を洗わなければ…」と言っている間に皆食べ始めてしまったので、その子も気にせず手づかみで食べていました。どの子もやはりたくましさを持っています。それを引き出すかどうかで、その子の性格が決まっていきます。



コテージに帰って、昼食をとり、バスで松阪に向かいました。ほぼ全員が爆睡！お疲れ様でした。

子供合宿は、合気道の稽古だけでなく様々な活動を通して、子供たちが人との付

き合い方を学び、生きる力を身に付けることを目的としています。今後ともご理解をお願いすると共に、お手伝いをしていただける方を心よりお待ちしております。

真剣勝負

【昇段審査】

昇段審査の時、「レポート」の提出が課されます。これは、受験者がどれ位合気道のことが解っているか、稽古に対してどのように考えているかを見るものです。

【初段】『合気道』

初段は、受身がきちんとでき、正確な技ができ、指導者に高度なテクニックを教わるためのスタートラインです。更に、白帯からは「有段者」というレッテルで見られます。弐段以上と区別が付かないため、高段者と同等に見られることも有ります。故に、常に技術的な向上が求められます。子供、白帯の人、に対して指導する事が大切です。基本の確認をしながら、教える事によって新たな気づきを得る大切な稽古です。

【弐段】

『稽古』：日常の稽古に出来る限りたくさん参加する事が、自己研鑽の大前提です。

『合宿』：稽古量を増やす事が第一の目的ですが、それ以外に、「初段」の所でも述べた通り、子供を含む、後進の指導も重要な目的です。最初は誰もが初心者で、多くの人々に支えられ、教えてもらってここまで成長できた事に気付く機会でもあります。後進の指導をすることによって、その恩返しとなるのです。

『審査』：審査中は、心身共に極限まで追い詰められます。それを如何に乗り越えるかが試されるのです。それを経験すると日常生活でも困難に打ち克つ力が備わります。また、試合が無い合気道における身近な目標でもあります。

『演武』（発表会）：大勢の前で演武することにより、平常心を保ちリラックスして演武を行う事の難しさに気付く機会です。それで、周囲の

事が良く見えるようになり、持てる実力を最大限に発揮できるようになります。

【参段】『合気道と日常生活』

初段・弐段と参段とは求められる事の程度が全く異なります。合気道に関しては、相手に合わせて技を行う事が大前提です。小さい人や、女性、子供に対してからだの大きい大人と同じように技をかけては、技をかけられたほうが、嫌になってしまい、伸ばしてやる事ができません。その意味からも、合宿やセミナーに参加して多くの人に接する事が必要です。仕事の都合で難しい人も、日常の稽古で早く来られる日は、子供クラスの終了 10 分前でも参加し、一言でも子供に声をかけるくらいの事ができなければ、やはりまだまだと言わざるを得ません。

日常生活では、後進の模範となるべく意気軒昂、澆漑とした姿を見せて欲しいものです。

有段者に求められるのは、稽古を通して後進を指導することによって、己の心を磨く事です。



サーファーズ・パラダイス



Newport



Williams Town の夜景



Gess の家にある Rosette という装飾



Williams Town から見た Melbourne の夜景



Gess の家にある手作りの暖炉



Melbourne 市内の駅



Melbourne の素敵なレストランが立ち並ぶ河畔